

常に居ますを佛という 此処に居ますを佛という
 共に居ますを佛という この佛を南無阿弥陀佛という
 このいわれを聞いて歡ぶを信心という 称えて歡ぶを念佛という

岩本月洲さん 小林先生ご法話より

鈴鹿組模擬葬儀

これからの葬儀を考える



10月30日午前は、鈴鹿組模擬葬儀が存仁寺本堂にて開催されました。このたびは伊勢亀鈴会福祉葬祭さんの、設営、前日打ち合わせから当日進行、研修会に至るまで絶大なるご協力により、盛大に開くことができました。また、各寺総代さんはじめ、多くの参加を頂きました。同じ葬儀でも住職により作法など様々、地域の慣例や、会葬参拝者の様々な思惑もあります。葬儀後の質疑応答では沢山の意見が出されました。今後も継続して研修を重ね、鈴鹿組での統一した浄土真宗の葬儀・法事を勤修してまいりたいことです。大切なことはご遺族も「死」を受け入れ、亡き方と向かい合う時間がなく、片付けごとになってしまっていることや、なぜ「葬儀」を勤めるのかというその大切な意義を僧侶は伝えていくこと、ご遺族の悲しみに寄り添っていくことの大事な法縁であることを改めて思いました。



午後からは、東海教区布教団布教大会が開催されました。桑名聞光寺大竹さんより仏法にご縁を頂くきっかけは祖父の「死」が縁となり今もお育てを頂いていることの味わい、三重組延長寺寺尾俊洋さんは、私たちは阿弥陀様のはたらきにより極楽浄土へ往生させていただくこと、「仏説阿弥陀経」を通しての味わいをお話。最後は、桑名組善徳寺加藤正人さんより還骨法要のご縁設定として、『御文章』『白骨の章』をいただき「人間のかなきことは老少不定のさかい」「後生の一大事」「阿弥陀仏を深くたのみまいらせて念仏申すべきものなり」の味わいをお話されました。

永代経法要、2日間にわたり小林先生よりご法話を頂きました。「私たちはもうすでに阿弥陀さまの攝取不捨、おすくいの中におさめ取られてありました。阿弥陀さまの御手の中に漏れることなく包まれてありますことに気づかせていただくこと。人と生まれ、この人生を歩み、お浄土への道を共に歩ませていただくこと、生まれてきてよかったと受け取らせていただくのです。」

先生は、布教使のご指導、育成とご本山の先達としていらっしゃいます。また、全国津々浦々布教の旅に出られます。そこで出会った方々が、阿弥陀様のおはたらきを頂いている姿、様々な方の味わいに触れられ、ご紹介くださいました。ご多用の中毎年ご無理をお願いしてご来院、お育てにあずかりました。



今年も初雪の便りが聞こえてくる季節になりました。私共夫婦は、ここ数年のことですが、晴れた日には万難を排してドライブを楽しむように心掛けていますが、中々その晴れた日に巡り会う事は少なく、当日空模様を見て決断することが今年はい多い年になりました。先日未だ行っていない襟裳岬へドライブしようとの思い付きから女房の子友を同行して片道250kmを往復12時間掛けて楽しんできました。当日襟裳岬は、綺麗に整備されて歌碑が2か所森進一・島倉千代子あり、美しく夕日輝く、何もないうちも岬でした。帰路の軽乗用車の中で聞く音楽は何とも言われぬ癒しで心が大きいに安らぎました。そのCDの中から流れる、若き日の母の思い出を詠う詩に、何時の間にか自分の母を重ねて聞いていました。母は、4人兄弟姉妹の末っ子で、昔流に言うとお嬢様でしたが、運命の悪戯か12人兄弟姉妹の長男、それも八百屋の跡取りとの結婚で、姑、小姑、商売のいろはに泣いた母を、幼いながらもそれを見ていた私には、心が痛く感じる歌でした。その母を想い、何もしてやれなかったことが悔やまれる自分を恥じる次第です。

北海道 大島義勝さん

小さな母の手

平成二十六年十月二十六日(日)

■冷たい小さな手を 温めてくれた母
何時の日か 母は小さくなっていた
ふと見る母の手は小さくなっていた
苦勞しどうしの母が 今も愛おしい

■小さな手を握る 母の顔が若かった
時々溜息をつく母は まだ若かった
他に違った人生が あっただろうに
小さくやわらかい手の母は笑ってた

■小さな母の人生 時だけが過ぎ行く
いつの日か母の手は あかぎれの手
笑った母と 小さなあかぎれの手
母は 本当に笑っていたのだろうか

■ささやかな小さな母の人生を思う時
母に 何もしてやれなく悔やむ日々
やり直すことが出来るなら 今一度
アルバムの母は いつも笑っている
南無阿弥陀仏

新米の季節

平成二十四年十一月五日(月)

思いでの井めし
新米の季節に必ず思い出す
父が住って十八年が経つ
母が住って十二年が経つ
食卓には、父母の姿は無いが
母の手料理をおいしそうにして
井めしを食べる父を思い出す

今朝も仏前にお供えをする
仏前の父母に手を合わす
父母の優しい心に感謝す
白米と、お味噌汁と、漬物
他には何にもおかずが無い食卓
父の笑顔、母の手料理井めし

「食卓を囲む時に思い出す
朝の食卓を囲む時に思う
本当は、何が好物だったのか
もう一品何か欲しかったのでは
「美味しいね」と呟く笑顔の息子
家族の笑顔が、一番のご馳走か
南無阿弥陀仏

新米の出回る季節が来ました。最近では内地米に負けない美味しいお米が北海道でも獲れるようになり我家でも食しています。ところで、ご飯茶碗に盛られた真っ白いご飯を頂く時に、父が生前に井めしを2杯も食べるその様子を母が、私に告げて笑っていた事を思い出します。テーブルには、これといったおかずも無い、御汁と漬物が有るだけの質素なお膳であったことを思い出します。父は明治生まれ、母は大正生まれで、それなりの苦楽を共にして来た為か、贅沢な話は聞いた事も無いし見たことも無い、三食を頂けることで満足をしていた様に私には見えませんが、もう一品何かおかずが欲しかったのではと思ひ、それをしてやれなかった事を悔やむことがあります。

北海道 大島義勝さんより

霜月の句

懐に 一物もなく 水澄めり

白菊の 匂い束ねて 供花とせり

秋気澄む 梵鐘長く 尾をひきて

真直ぐに 流れる川や 秋深し

コスモスの 花影ゆれる 土を掃く

秋雨や 曇るメガネの 玉を拭く

結び目がほどけずままだに 老いの秋

落合登代子



報恩講法要で、作品展示を行いたく趣味の作品、収集、文化祭出品などをお貸し下さいますようお願いいたします。 期間十二月五日より八日まで